文豪たちの釣旅　プレビュー掲載

大岡 玲

フライの雑誌社の単行本新刊『文豪たちの釣旅』（大岡玲著）より、〈山本周五郎―「ぶっくれ」で「ごったく」で、でも、いとおしいこの世界〉の一部（一三五頁～一四二頁）を掲載します。

〈山本周五郎〉「ぶっくれ」で「ごったく」で、でも、いとおしいこの世界

…　さて、本題の本題、釣り。

山本周五郎は、作中によく釣りの場面を使ったが、本人もきっと嫌いではなかっただろう。『青べか物語』の先生にもよく釣りをさせている。ただ、浦粕＝浦安という土地柄から多くの人が連想するだろう海の魚ではなく、もっぱら根戸川＝江戸川の川べりや「百万坪」の中の水路でフナを釣っている。あとは、ハゼ。青べかがあるのだから、遠浅の干潟でボラだのキスだの鱸（すずき）だのを狙ってもよさそうなものだが、そういう記述はない。やはり海は「ぶっくれ」の青べかには荷が重いのか。海の魚でいえば、大潮で汐が引いたとき干潟に行って、足で「踏む」カレイの話くらいしか見当たらない。

昭和初年代の浦安なら、それはたしかに川魚もずいぶん釣れたことだろう。が、平成の御代（みよ）である今は、とてもそういうわけにはいかないにちがいない。もっとも、たしかにハゼは釣れるのだから、鮒だっていないとは限らないが、せっかく出かけていってコンクリート護岸に固められた川べりに釣り糸を垂らすのも、なにか切ない。ここはやはり、海に出る、それも『青べか物語』ゆかりの船宿「千本」の船に乗るのが順当な筋道というものだろう。

訳知りの釣人なら先刻承知のことだろうが、「千本」のモデルは浦安の老舗船宿「吉野屋」である。これまでにも何度か足を運んだことがあるが、とても気持ちのいい船宿だ。「客に対してえらぶった口は決してきかない。他の船宿だと、客に対して釣りの講釈をしたり、いいの悪いのと文句を云う。『千本』では腕っこきの船頭を揃えていながら、求められない限り、決して客に教えたり、客の意志に反対するようなことはない。」と、周五郎も『青べか…』の中で書いているが、まったくその通り。ご主人の吉野眞太朗さん（作中の「長」の次男にあたる）を筆頭に、親切で出しゃばらない人当たりのいい船長ばかりがいる宿なのだ。

…　さて、狙う魚は、七月のことゆえキスか鱸。鰓洗いをする派手な鱸は「青べか」にはちょっとそぐわないかと、キスにすることにした。もっとも、こんな言い方だとキスに申し訳ない気はするのだが。

釣り場は浦安の岸辺からなるべく近いあたりがいい、と駄々をこね、当日船を出してくれた青山船長をまず困らせた。

「近くにだって魚がいないってわけじゃないですが、やはりある程度数を釣るとなると木更津の方まで行かないと…」

「三番瀬あたりでもムリですか？」

「今の時期だとまだ魚が入っていないんだよね。それに、今日これからだと汐が引いてしまって、浅くなりすぎるんです」

と、わがままをやさしく諭される会話のあと、船は木更津を目指す。

…　昭和三十五年当時、浦粕＝浦安を三十年ぶりに再訪した山本周五郎は、こんな風に書いている。

「日本人は自分の手で国土をぶち壊し、汚濁させ廃滅させているのだ、と私は思った。修善寺へいったら、あの清流に農薬が流れ込むため、蛍（ほたる）もいなくなったし川魚も減ったという。そんなに農薬ばかり使って米ばかり作ってどうしようというのか、史上最高の収穫と、米をたらふく食っている一方、水が汚され、自然の景物がうち毀（こわ）されていることを知らない。また、いま私が住んでいる市では、到（いた）るところで木を伐（き）り、丘を崩し、「風致地区」に指定してある海岸を、工場用地として埋め立てている。どこへいっても

『文豪たちの釣旅』大岡玲著　新書判　288 頁　税込価格 1,200 円

やまもとしゅうごろう
1903 年― 1967 年。山梨県初狩村生まれ。小学校卒業と同時に銀座の質店、山本周五郎商店に住み込み、それが筆名の由来となった。市井に暮らす庶民の暮らしをあたたかく描いた名作が多い。『赤ひげ診療譚』『青べか物語』『さぶ』など。映画化された作品多数。

現在の旧江戸川と船着き場　*photo by Kuzuo Kikuchi*